

令和2年度 病害虫発生予察 注意報第3号

令和2年8月11日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

- 1 対象病害虫 コブノメイガ
- 2 対象作物 普通期水稲
- 3 対象地域 県内全域
- 4 発生面積 多い
- 5 発生量 やや多い

6 注意報発表の根拠

- (1) 農林水産研究指導センター（豊後大野市三重町）の病害虫発生予察田における8月5日の調査では、25株当たり苞数は44.3で平年の5.9より多く、過去10年間で苞数が多かった昨年の50.8と同等である。
- (2) 7月30～31日の巡回調査では、県内40圃場中2圃場で中発生、25圃場で少発生を確認し、発生圃場率は67.5%で平年（18.8%）及び昨年（35%）より多く、多発した平成25年の66.7%と同等、25株当たり苞数は9.7で平年（0.9）及び昨年（1.1）より多く、25年の4.7より多い。

普通期水稲における発生状況

発生圃場率 : 67.5%（平年：18.8%、昨年：35%、25年：66.7%）
25株当たり苞数 : 9.7（平年：0.9、昨年：1.1、25年：4.7）

- (3) 九州北部は7月30日に梅雨明けして以降、高温少雨傾向が続いており、コブノメイガの成育に好条件で推移している。8月6日の気象予報によれば、向こう1か月の気温は平年より高く降水量は平年並と予想されており、本虫の増殖に好適条件が続くと考えられる。

7 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫の防除適期は孵化直後の若齢幼虫期で、粒剤の場合は発蛾最盛期、粉剤や液剤の場合は発蛾最盛期から5～7日後になるので、防除時期を失しないよう注意する。
- (2) 本虫の予察田における発蛾最盛期は7月5半旬頃で、次世代の発蛾最盛期は約1か月後となるが、地域によって発蛾最盛期が異なるので圃場を確認のうえ、薬剤防除を行う。
- (3) 本虫の発生が多い圃場で、トビイロウンカの発生も多い場合は、トビイロウンカの防除適期を優先して同時防除を行うことが効率的である。
- (4) 動力散粉機や噴霧機を所有していない農家においては、粒剤散布が簡便で被害防止には有効である。なお、粒剤散布時には湛水状態とする。
- (5) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫対策チームのホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照し、収穫期の近い水稲では農薬使用基準（使用時期、使用回数等）に注意する。
（ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/oita/>）

